

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月9日現在

機関番号：64401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07342

研究課題名(和文) アフリカにおける価値の計量と個別のアカウンタビリティにかんする人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study of Quantification and Local Accountability: The case of Africa

研究代表者

早川 真悠 (Hayakawa, Mayu)

国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・外来研究員

研究者番号：20720361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、南部アフリカの人びとの経済実践について、商売方法や利益の使い方だけでなく、その会計方法(資産価値等の計量・数値化・管理)に注意しながら、人類学的調査・研究をおこなった。具体的には、レソトに住むジンバブエ人移民の零細行商について調査した。その結果、(1)やや高めの価格で商品を掛売りにする、(2)掛け取引(だけ)は帳簿で管理する、(3)支払い遅延への罰則はとくになく、収金にかかる費用や労力は基本的に行商人の負担となる、という彼らの行商の特徴を明らかにした。今後の課題として、彼らが帳簿を限定的に使う理由と遅延損害・債務不履行の捉え方についてさらなる調査をする必要があると考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

会計や監査は、近年の人類学や社会学で高い関心を集めている。これらの研究は、先進諸国における高度に抽象化した会計・監査制度が、過度な数値化や過剰な比較を推し進め、統治や抑圧の装置として働くことを問題視してきた。本研究では南部アフリカのローカルの人びとによる(一見一貫性がないような)価値の計量や財産管理の方法を会計の一種として捉え、その特徴を明らかにし、数字や帳簿、計算の機能と意味を彼らの視点から明らかにしようとした。

研究成果の概要(英文)：This research attempted to examine the economic practices among people in Southern Africa, focusing on not only their business methods and uses of profits but also their own accounting systems, that is, how they measure, quantify, and manage the value of assets.

It specifically explored the case of peddling activity by Zimbabwean migrants in Lesotho. As a result, it revealed some characteristics on their business practices: (1) Their goods are sold with slightly higher price than in the marketplace. (2) They do bookkeeping regarding credit-sales (only). (3) There is no penalty on customers' late-payments and, when it happens, it is basically the peddlers' patient effort that solves the problem.

Based on these results, it is envisaged that further research will be needed exploring the reason for peddlers' limited-use of bookkeeping and their understanding of the concept of default-charge.

研究分野：文化人類学

キーワード：南部アフリカ レソト 貨幣 会計 行商 経済人類学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国の情勢などにより、従来の生計手段や通貨の価値を全面的に信用することができなくなったとき、そこに住む人びとはどのように個人や社会の経済生活を維持するのだろうか。彼らはそのとき、どういった手段でモノの価値を計量し、交換をおこない、財産を管理するのだろうか。

この問いは、報告者のそれまでの研究にもとづいている。報告者は2007年から2009年、南部アフリカのジンバブエ共和国にて長期現地調査をおこない、ハイパー・インフレ下における人びとの貨幣使用について人類学的研究をおこなった(早川 2015)。この研究で得られた知見は、現地の人びとが極度に不安定な経済状況のなかで、公式・非公式にかかわらず多様な基準を参照しながら貨幣価値を評価し、複数の通貨を併用しながら生活するということだった。このジンバブエのハイパー・インフレの事例について、国立民族学博物館共同研究会(「会計学と人類学の融合」代表者:出口正之)にて、会計学者と検討する機会を得た。この共同研究をつうじて報告者は、ジンバブエやアフリカの人びとによる経済実践を、彼らの経済活動そのもの(生産、流通、消費、生計、交換の方法など)よりも、会計(価値の計量と管理の方法)に焦点を当てて理解するという着想を得た。

ジンバブエのハイパー・インフレは、2009年に終息した。現在は「複数通貨制」の導入により数種類の外貨(米ドルや南アフリカのランドなど)が法定通貨となり、現地通貨ジンバブエ・ドルは廃貨になっている。しかし、ハイパー・インフレ終息後も、ジンバブエは外貨の供給不足などにより、外貨・「ボンド通貨(中央銀行が発行する代替通貨)」・電子マネー・(ときには農産物などの)モノなど、人びとのあいだで複数の交換手段が併用され、またその価値も公式経済部門と非公式経済部門とで大きく異なり、多数の価値尺度が並存する状況が続いている。

以上のような報告者の問題関心とジンバブエの現地状況を踏まえ、本研究では、通常の経済システムや貨幣価値に必ずしも信頼がおかれていない現場や社会における、固有の会計方法(「個別的アカウンタビリティ」)について、明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ジンバブエ(ないし南部アフリカ)の人びとの経済実践の、「個別的アカウンタビリティ」を明らかにすることにある。

近年、人類学や社会学において、会計や簿記、計算、監査への関心が高まっている。これらの研究では、まず、現代社会の経済活動の基盤である計算実践は、(これまで新古典派経済学において前提とされてきた「経済人による合理的思考」によるものではなく、)複式簿記や会計基準など、さまざまな計算装置や計算制度があつて初めて可能になるとされる(Callon and Muniesa 2005; 國部 2013)。また、こうした計算装置や計算制度が、人間の諸活動を過度に数値化し、過剰な比較や監査を強いることで、統治や抑圧の装置となることも問題視されている(Strathern 2000; パワー 2003)。

それでは、このような近代社会の計算装置や計算制度が説得力をもたないような環境や社会では、人びとはどのように財産管理や経済活動をおこなっているのだろうか。また、彼らが何らかの方法で計算や計量、数値化をしているとすれば、その方法は近代社会の計算装置や計算制度によるものと、どのように異なっているのだろうか。

本研究では、ジンバブエ(ないし南部アフリカ)の人びとによる独自の会計方法(「個別的アカウンタビリティ」)を明らかにし、厳格な市場原理や制度的制約によらない「人びとの経済(popular economy)(Guyer 2004)」の可能性を検討する。

3. 研究の方法

本研究では、(1)ジンバブエ(ないし南部アフリカ)現地調査、(2)文献調査、(3)会計学との比較研究の3側面から、ジンバブエ(ないし南部アフリカ)の人びとによる独自の会計方法(モノの計量、価値の数量化、財産状況の管理)を明らかにする。

研究申請当初は、調査地としてジンバブエを考えていたため、調査項目として(1)法定通貨(外貨とボンド通貨)の貨幣機能(交換、支払い、貯蔵、価値尺度)と人びとによる使用状況、選好の差、(2)法定通貨の貨幣機能を保管する代替手段(モノや電子マネー、信用等)の機能と使用状況、(3)法定通貨および代替手段を併用しておこなわれる、経済活動の実践と会計方法を挙げていた。

しかし、調査地をジンバブエからレソトに変更したため、とくに現地調査では(1)調査対象であるジンバブエ人移民による行商の概観を理解すること、(2)インフォーマントや大学関係者との人脈形成、(3)具体的問題や着眼点を探ることを優先させることにした。

4. 研究成果

(1)実施内容

1年目に、調査地・調査対象の選定をおこない、レソト王国のジンバブエ人移民の零細行商に決定した。

2年目に、実際に現地調査をおこない、ジンバブエ移民行商人の集住する地区において多数のインフォーマントと知り合い、またレソト国立大学関係者とも人脈を築いた。

ジンバブエ移民の行商活動の概要とその特徴、それを踏まえてさらなる調査課題を見出した。

会計学・簿記、経済人類学（負債や遅延型交換など）の文献調査をおこなった。

（2）当初の予定からの変更点

調査予定地をジンバブエからレソトに変更した（調査予定地変更の可能性については、申請書に記載していた）。これにより、ジンバブエのような特殊な複数通貨（外貨、ボンド通貨、電子マネー）状況については扱えなくなった。ただ、レソトの場合も「複数通貨」と考えられるような状況はある。ジンバブエ人移民の行商では、帳簿の使用目的が限定的で、帳簿で資産を一元的に管理しないことが分かっている。現金、モノ（商品在庫）、帳簿（未回収金の数値）が資産管理に併用されている点がレソトの場合のポイントとなる。

申請時に目標としていた簿記3級取得は、叶わなかった。ただし、簿記・会計学について文献講読をおこない、（資格取得のための学習に特化しない）知見を得た。

2019年3月にジンバブエでワークショップをおこない、現地研究者らと研究成果を共有する予定だったが、報告者の日本での都合と現地の事情等により、実施できなかった。現地研究者とはメール等で連絡を取り合い、論文の共同執筆作業を進めている。

（3）現地調査の内容報告

以下では、2018年8月1日～8月9日、8月20日～9月17日に実施した、レソトにおける現地調査の結果について報告する。なお、以下の内容は2019年5月19日、京都精華大学で行われた日本アフリカ学会第56回学術大会にて発表した（5.学会発表）。

背景と調査対象

ジンバブエではとくに2000年以降、政治・経済情勢が不安定になり、人口の国外流出が続いている。移住先は、南アフリカ、イギリス、マラウイ、オーストラリア、ボツワナなどが上位を占めるが、国土を南アフリカに囲まれた小国レソトにも、（相当数の）ジンバブエ人移民が住んでいる。レソトに住むジンバブエ人のなかには、大学や国際機関などで働く高学歴層の移民たちも少なくない。だが、レソトの人たちが、「レソトに住むジンバブエ人」と聞いて真っ先に頭に思い浮かべるのは、さまざまな日用品を肩や背中に担いで、せっせと外で売り歩く、インフォーマルな行商人「*Bo Makhotsi*」のことである。

「*Bo Makhotsi*」とは、ソト語で「友だち」を意味する。ジンバブエ人零細行商人は、地元レソトの人びとから親しみをこめてこう呼ばれる。行商人はホウキやモップ、ブラシを肩にかつぎ、香水や保湿クリームなどを詰めたリュックサックを背負い、毛布や絵画を脇にかかえ、女性であれば大きなシャモジやスプーンを頭にのせ、都市部や農村部をせっせと歩きまわる。

レソトは国土の大部分が山岳地帯で、首都マセルをのぞいて大きな町はなく、舗装道路の走る地域も限られている。農村部の家屋は、耕作地として使われる平地を避けるように、山の斜面に建てられることが多い。ジンバブエ人行商人は、起伏の多い道路や岩肌に見える険しい山道を歩き、都市や幹線道路から遠く離れた村落を訪ね、各家庭の玄関先まで商品を届ける。彼らの姿は遠くからでもよく目立ち、レソトで広く知られる存在になっている。

商法

ジンバブエ人行商人の多くは、ジンバブエの地方都市や農村部から、先にレソトへ移住した親族や同郷者を頼ってやってくる。典型的には、首都マセルの郊外や農村各地に長屋の間などを借り、単身または夫婦で暮らす。出稼ぎで得た収入で、ジンバブエに残してきた子どもたちや両親、親族たちを養うための仕送りをする。

彼らが売る商品はおもに南アフリカのヨハネスブルグで仕入れられ、それらを仕入れ値の約3～4倍の価格にして売る。商品を買うのは、おもにレソトの都市部や農村部の低・中所得層の人たちである。

行商人の商品価格は、首都マセル内の商店と比較すると少し高めである（表1）。

（表1）行商人の商品価格と首都内商店での価格

	仕入れ値 (R/L)	販売価格 (R/L)	【参考】首都内商店での価格 (R/L)
熊手	11-12	50	30-35
ほうき	20	60	45
デッキブラシ	18	60	(不明)
モップ	18.50	60	40

通貨単位は南アフリカ通貨のランド(R)またはレソト通貨のロチ(L)。ランドとロチは1:1のレートで交換される。

特徴1：掛売り

価格が若干高いにもかかわらず、行商人の商品が売れるひとつの大きな理由は、行商人が商品を掛売りにするからである。掛売りの場合、商品の代金は販売時の翌月末に回収される。商品によっては3か月の分割払いなどにされる場合もある。

特徴2：帳簿

行商人は各自が帳簿を持っており、掛売りについては必ず記録する。記録する内容は、客の名前、村名ないし職場名、商品名、未払い金額、連絡先（携帯電話の番号）、支払期日である。分割払いなどで部分的な支払いがあれば、その都度、未払い残額をあらためて記入し、帳簿の内容を更新する。代金が全額支払われたとき、その取引内容が書かれた欄を、斜線で消去する。

特徴3：未払金回収と支払い遅延

行商人の商売は、基本的に月の半ばに商品を販売し、月末から月初めにかけて（前月分に売った商品の）代金を回収する、というサイクルになっている。月末になると、行商人は未払金のある客に携帯で連絡し、集金に行く日（だいたい翌日）と金額を客に事前に伝えておく。

しかし、掛買いをした客が支払いの期日を守るとは限らない。行商人によれば、支払い日を守るのは10人中7、8人ほどで、あとの2、3人は、守らない。しかし、支払いが遅れても、客への罰則はとくにない。行商人は何度も客に連絡し、客のもとへ足を運び、基本的にはただ辛抱強く、労力と費用、時間をかけて代金を回収する。

現地調査のまとめと今後の課題

行商人の商売と資産管理の方法には、一般的な会計や簿記でなされる資産管理の方法とは異なる点がある。

彼らが帳簿で管理するものは、限定的である。会計や簿記では事業実体（business entity）の取引すべてを数値（金額）で記録し、各費目の金額を合算し、資産を一元的に管理する。これに対し、行商人が帳簿で管理するのは、あくまで掛売の未回収金のみで、仕入れや販売、未払金の回収作業に使われた費用、商品在庫の価格など、掛売り以外の取引や資産は帳簿で管理されない。また、帳簿には顧客ごとの未回収金を数字（金額）で記録するが、それら個々の数を用いて何か計算するようなことはしない。例えば、個々の顧客の未回収金を合計し、ある行商人がかかえる未回収金の総額を計算するようなことはしない（ようである）。

掛売りには支払い遅延が（少なからず）発生する。行商人によれば、支払いが滞るケースは10人中2~3人で、それほど多くはないと言う。しかし、傍で見る限りでは支払い遅延はもっと多いように見え、行商人の仕事は掛売りの代償、つまり未回収金の回収が中心になっているような印象を受ける。だからと言って、支払い遅延をした客にたいして追徴金などの罰則を課そうとするような気配はない（ように見える）。

今後の課題として、彼らの帳簿使用が限定的である理由と遅延損害・債務不履行の捉え方を、さらなる現地調査から理解する必要がある。また、同時に、われわれの社会の掛売り（たとえばクレジットカード決済と支払い遅延にたいする罰則、遅延損害金の計算方法や根拠など）と、彼らの方法との比較も進める必要がある。

<引用文献>

- 國部克彦、2013、「経済活動と計算実践」『日本情報経営学会誌』、33(4):4-18.
- 早川真悠、2015、『ハイパー・インフレの人類学』人文書院。
- 早川真悠、2019年5月19日、「レソト王国におけるジンバブエ人移民の行商」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、京都。
- パワー、マイケル、2003、『監査社会』（國部・堀口訳）東洋経済新報社。
- Callon, M. & Muniesa, F. 2005. Peripheral Vision: Economic Markets as Calculative Collective Devices. *Organization Studies*, 26(8), 1229-1250.
- Guyer, J. 2004. *Marginal Gains: Monetary Transactions in Atlantic Africa*, University of Chicago Press.
- Strathern, M. (ed.) 2000. *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics, and the Academy*. Psychology Press, 2000.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

- 早川真悠、2019年5月19日、「レソト王国におけるジンバブエ人移民の行商」日本アフリカ学会第56回学術大会、京都精華大学、京都。
- 大貫一、早川真悠、出口正之、2017年9月23日、「ジンバブエの会計現象のトランスフォーマティブ研究 超インフレ状況下におけるジンバブエの経済現象に関する試論」、日本会計研究学会第76回全国大会、広島大学、広島。

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

エッセイ・通信

早川真悠、2018、「カネを焼く」『月刊みんぱく』2018年5月号、7-8頁。査読なし
出口正之、早川真悠、大貫一、2018、「知的興奮を惹起するトランスフォーマティブ研究」
『民博通信』No.161、12-13頁。査読なし
早川真悠、2017、「「計算」と「加減」」『現代思想』2017年11月号(Vol.45-20)、262頁、
青土社。査読なし

学会以外の口頭発表

早川真悠、2018年5月12日、「貨幣の計量的不整合：2008年ジンバブエのZDの教え方」、
国立民族学博物館共同研究会「会計学と人類学の融合」第8回研究会、国立民族学博物館、
吹田
Hayakawa, Mayu, November 26, 2017, 'The Potential of the Useless Money: The
non-disappearance of the inflating currency in Zimbabwe', 7th African Forum: African
Potentials to Develop Alternative Methods of Addressing Global Issues, Rhodes
University, Grahamstown, South Africa
早川真悠、2017年10月14日、「使えない貨幣のポテンシャル ジンバブエにおける超イ
ンフレ通貨の非消滅性」、科学研究費補助金基盤(S)『「アフリカ潜在力」と現代世界の困難
の克服』第6回全体会議、京都大学、京都。
早川真悠、2017年10月2日、「ハイパー・インフレ下の財務諸表 ジンバブエの新聞記
事より」、国立民族学博物館共同研究『会計学と人類学の融合』第5回研究会、国立民族学
博物館、吹田。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。